「幼児の教育」復刻記念論文

審査経過の報告（審査委員会）

八〇年の伝統を持つ保育誌の復刻記念という土壌と、「幼児の教育」誌を素材とするという条件のゆえか、保育史関係の論文が目立った。

中では、金子真知子氏の「生活主義保育の源流」が、明治三〇年代の関西保育界の動向、とりわけ三市聯合が神戸保母会の脱会によって変貌する経緯を、詳細に考証した力作であった。意欲的な資料の発掘と慎重な照合を通して、三市聯合分裂のダイナミズムを、「生活主義」という教育思潮の上に位置づけ直し、従来の定説を修正しようとする試みである。

一方、国吉栄氏の「初代編集者東基吉を通してみる『幼児の教育』創刊の時代」は、復刻された本誌を最大限に活用しつつ、保育ジャーナリズムの黎明期を照射しようとする魅力的な試みであった。氏もまた、従来の定説を問うところから出発し、結果として、その輪廓を追うほどに不鮮明にかすんでいく人物像に寄り添いながら、編集者に負わされる影の部分を浮き彫りにし、啓蒙誌の宿命を指し示すのである。

興味深いことに、両氏の論文は、共に明治期の保育史に課題を設定しつつ、それぞれに対極的な二つのタイプを分け持っていた。すなわち、パズルを解くような綿密さで資料の照合をくり返し、飽くまでも資料を重ね合わせることで核心に近づこうとする前者の求心性と、資料の解読に独自の視線の投入を試み、そこから新しい意味の世界を開示していこうと試みる後者の遠心性である。歴史とは、過去の事実の集積なのか、或いはまた、意味の跳梁する王国なのであろうか。新しい歴史学に投げかけられた二つの問いが、はしなくも、この二つの論文に分け持たれていて、限りない興味を誘われた。結果として、この両者に、優秀賞を分け持って頂く次第となった。

私見をつけ加えるなら、金子氏の場合、問題を、「生活主義との関連」という、教育学上の一局面に限定してとらえることと、明治期日本の近代化とその振幅という、思想史的・文化史的文脈の上に位置づけることの、どちらがより豊饒

であろうか、という問いが残った。関西保育界の分裂という、大局的に見るなら所詮瑣末事に過ぎない事件から、何を逆照射させ得るかは、真剣に問われねばならない学問的な課題であろうと思うからである。

国吉氏に対しては、その解読に対して、一層の鋭さと深さを期待したい。そして、より立体的な意味把握、つまり、解読の錘が単に表層に止まらず、より深部まで下ろされるならば、資料は単なる実証の道具であることを止めて、意味の世界を呼び覚ますメタファーとして、より有効に機能するのではないかと考える。

現場人として、肉体を労しつつ日を送りながら、なお、この募集に応じられた大槻、小坂田、松江三氏に対しては、一言、その意欲と労をねぎらっておくべきであろう。実践に密着したその論考は、いわゆる「論文」の形には必ずしも嵌まっていなかったが、それもまた、保育研究のあり方に対する一つの問題提起として受けとめたいと思う。

なお、復刻誌の活用は、必ずしも歴史研究に限られるものではない。その意味では、誌上から拾い出した一つの視座によって、自身の実践を見直すという、小坂田氏の試みはユニークであったが、残念ながら、充分に成功したとは言い難かった。同氏をも含めて、奨励賞の四氏の、今後一層の実践と研究の充実を期待している。

最後に、応募論文を通じて、審査員一同も教えられるところが多く、様々な課題を投げかけて頂けたことを感謝したい。

（文責・本田）

尚、審査委員は復刻刊行委員と本誌編集委員とで構成されました。

幼児の教育　第八十一巻　第五号
五月号　©　定価二七〇円
昭和五十七年四月二十五日　印刷
昭和五十七年五月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津　守　真
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。